

## 神々の見捨てた土地

## マクワンプル郡チサパニ集落訪問

12月上旬、私は久しぶりの国内出張で、カトマンズ盆地の南西隣にあるマクワンプル郡に出かけた。昨年年度末に終了したJICAの開発調査の事業化第1弾で、ネパールのNGOと協力して村落開発と住民防災システム構築を同郡北部のチサパニ集落で行うための予算が承認されたので、一度現地を見ておこうと思ったからである。

チサパニ集落は1993年の集中豪雨の際に土石流災害を起こしたバルン川上流の山を一つ越えた向こう側に位置し、バルン川中流のフェディガオン集落までは川筋を車で上り、そこから歩いて約400m、所要約1時間で着く。海拔2100mの等高線にほぼ沿って集落が点在し、高原気候と相まってカリフラワー生産が盛んと言われている。

だが、この集落は極めて大きな問題を抱えている。マクワンプル郡の北の境界となるトリスリ川の支流アグラ川の最上流部にあたるこの集落は、マナスル山群を一望できる絶好のロケーションであるが、シワリク地層の岩盤が極めて脆く、毎年雨季の豪雨で斜面崩壊や土石流が頻発し、年々農地に損害が生じている。さらに土石流は急峻なマハーバーラタ山脈の北側斜面を流下し、下流のマハデブベン橋を破壊する危険性も高い。この橋は、現在カトマンズとボカラ、インドを結ぶこの国の大動脈プリティビハイウェイ上に位置するため、いったん破壊されれば、カトマンズ盆地は完全に孤立する。

チサパニ集落に話を戻すと、住民の2/3は機会があれば移住したいとさえ思っている。行って見て感じたのは、私が今までネパールで見たうちで最悪の土地であり、どんな手だてをもってしても斜面崩壊を防ぐことはできない気がした。辺り一面大小の地滑りが起きており、溪流の浸食も集落のすぐそばまで迫っている。底冷えを感じさせる荒涼の大地である。私達の事業も相当な困難が予想されるが、住民に希望の灯を点せるよう出来る限りのことはしたいと感じた。

住民とも話をした。彼等も、この村をよくするためにやれることはするとの決意に満ちていた。援助にすれているどこの村人とは明らかに違う決意を感じた。たとえ神様が見捨てた土地でも自分達で開発して見せると。

ヒマラヤばかりではない。ネパールにはこんな土地もあることを皆さんに知っていただきたいかった。(浩司)

## うちにおいでよメシあるから

## 我が家の使用人紹介(その4)

樹生をネパールに連れて来るにあたって、コック兼子守をやってくれる使用人を1人増やしました。それがMs. Nanuka SUNWAR、通称ナヌさんです。27歳2児の母。コックとして働き始めたのは97年の4月からで、樹生とほぼ同時期に生まれた赤ちゃんのいる大町家で働いていました。それ以前は子供を産む前に日本人の家で掃除や洗濯をする使用人として5年間働いていたそうです。そのせいか少しですが日本語がしゃべれます。このため樹生が少しでも早く日本語を覚えられるように、樹生には日本語で出来るだけ話しかけるようにしてもらっています。朝は「おはようございます」から始まり、「みきおー、どーしたの。おいしい? いい子ねー。」などなど一生懸命樹生に語りかけてくれます。彼女自身にも子供がおり、大町家でも樹生と同じ月齢の子供の世話をしていたため、樹生の扱いも手慣れたものです。また料理も上手く呑み込みが早いので、作ったことのない料理でも口で説明するだけでたいてい作れます。ただし、コックさんに食事を作ってもらおうようになったら、油もガスも調味料も早くなくなるようになりました。美味しい料理には油も調味料も沢山使われているのですね。彼女がいるお陰で樹生と接する時間がかなり持てるので、それも悪くないですね。

おかしいのは、以前からいるKCやシータに対し彼等の方が年上にもかかわらず、「KCパイ(弟)。シータバヒニ(妹)注1」と呼ぶことです。理由は彼等が自分のことを「ディディ(姉)」と呼ぶからだそうですが、自分は年齢は下だけど、コックで仕事の内容は上だということを暗に示したいからではないかと思っています。とはいっても、KCがいない時は洗濯もするし、「コックと子守以外の仕事はしません。」とは言わない働き者です。

私達も残すところ1年を切ったので、帰る時には今より料理のレパートリーが増え、日本語も上達するように教えてあげられればいいなと思っています。(美澄)

注1 ネパール語では人を呼ぶ時、年上の人に対してはダイ(兄)、ディディ(姉)、年下に対してはパイ(弟)パヒニ(妹)を使いちょうど日本語の「ちょっとそこのお兄さん、お姉さん」のような使い方をします。

## 【一口解説：ナヌさんの民族背景について】

上の美澄の紹介文で、ナヌさんの出身ジャート(カースト)には触れておりませんので、少し補足します。彼女の苗字「スンワル」は、そのままズバリ彼女がスンワル族という、東部山間部のオカルドゥンガ郡周辺に居住する少数民族出身であることを示しています。(厳密には民族とカーストは別物ですが、ネパールではこれらがごちゃ混ぜになっています。)スンワル族とそのやや西側に居住するジレル族は、ともに西部山間部に居住するマガール族の傍系と言われており、ナヌさんが来た当初、シータは彼女のジャートを「マガール」だと言っていました。但し、ジレル族はチベット密教の影響で仏教化したのに対し、スンワル族は依然としてヒンドゥー教を信仰しているそうです。当然牛肉は食べない筈ですが、以前別の日本人家庭で働いていた時、味見のためだと言われて強制的に食べさせられたことがあるそうです。なんか可哀想。

(Dor Bahadur BISTA, "People of Nepal (ネパールの人々)"を参照)

(浩司)

これまでも繰り返し述べてきたように、JICAはミッションの数が多い。12月など、日本人スタッフに2名欠員が出ていたために、私がアテンドしたミッションは合計4件。週替わりで来訪するミッションをアテンドすると同時に翌週の受入準備もこなし、冬休み前にはほとんど疲れて体調を崩してしまった。

12月に私がアテンドした中に、「専門家養成研修現地研修」というのがある。このプログラム、過去に3回受入を経験したが、これほど事務所にとって実りの少ないミッションはないと悪印象しか持っていなかった。訪問先のアレンジをしても彼等だけで行けないから事務所員が同行せねばならない、英語もまともにできない、参加者は殆どJICAおほかえの旅行という認識が強く、ネパールの問題点ばかりを紹介すると「ネパールの印象が悪くなった。」と苦情が出る、そして言うだけ言っておきながら報告書すら送付してもらえない、等々。聞くところによると状況は他の事務所でも同じらしい。

「専門家養成研修」とは、JICAの技術協力の柱とも言える専門家の自前での養成確保を目的としたプログラムで、3週間の国内研修と2週間の海外研修から成る。一昔前の専門家といったらいわゆる「技術屋さん」が多く、特定技能、ノウハウの指導は得意だが「貧困」「女性」「環境」といったグローバルなテーマ全体を見渡せるバランス感覚溢れる人材は少なかった。しかし、今日ではいかなる技術屋さんでもこうした知識は極めて重要であり、それを学んでいただくために「専門家養成研修」はスタートした。という理解は建て前で、正直な話、「JICAは研修まで施さないと専門家がリクルートできないのか？」との疑問が本音に近い（ここまでして専門家に頼る必要が果たしてあるのかと常々疑問に思っている）。

これほど印象の悪い「専門家養成研修」だが、12月に受け入れた「開発と貧困」コースと接してみても、少し考えを改めようかと思った。このコースの参加者は英語もかなり流暢で、各訪問先でも質問も活発に行われた。毎晩深夜まで復習のための会議を持ち、時には議論が白熱して午前3時まで会議が及んだこともあったと聞く。滞在期間最後に行われた報告会も非常に盛況だったし、私達にもかなり役立つ報告書が作成されそうだと期待も抱いた。さらに嬉しいのは、研修生の有志数名が今回の報告書をさらに整理して季刊誌「国際協力研究」に投稿しようとしていることである。ここまでモチベーションの高い研修は極めて稀だとはわかっているけれど、アテンドした甲斐があったとつくづく思った。（浩司）

## チネコを雇ってやってくれ！

### 壮絶、ネパールコネ社会

ネウパネ所員の後任は、ソウラブ・ラナさんに決まった。私を含む5人の選考委員の評価が、筆記、面接とも最も高かったのも、文句のつけようのない採点だった。でも、この過程には問題が多かった。応募した約90名の中には、私のチネコ（知り合い）もいた。彼が書類選考で落とされた理由が、「新聞広告に出した条件（年齢30歳以下、社会科学の修士号保有）に抵触した」というものだったが、面接してわかったのは、最終選考に残った中の数人は、新聞広告にあったもう1つの条件「教育、林業、地方開発、環境等の分野の知識がある者」に見事に抵触しており、「チャンスを与えてくれたら何だって勉強する。」なんて胸を張って堂々とたまう、即戦力とは程遠い連中だった。私は書類選考には加わっておらず、一部の現地人スタッフで選考したのだが、なんで私のチネコ（ソウラブさんには申し訳ないが、彼以上の即戦力になると思った）が自然科学の修士だからという理由だけで落とされて、バックグラウンドの全然ない奴が最終選考に残ったのか、非常に疑問だ。おまけに最終選考の11人全員が高カースト出身というのにも、何らかの作為を感じざるを得ない。

この国は日本以上のコネ社会。選考過程では事務所員への「口添え」が横行した。ソウラブさん本人にしても、カトマンズの日本人社会の重鎮のご夫妻のチネコだということで、同夫妻より所長、次長に「宜しく」との電話があったと聞く。事務所の現地人スタッフへの攻勢はさらにすさまじかったらしい。就職機会の少ないこの国にはありがちなことだ。

ところで、12月は受付嬢のスニータさんも退職した。彼女の後任にも180人近い応募があった。12月下旬のある朝、私は私の住むラリトプール市の前市長サキャ氏から自宅に電話を受けた。チネコが受けるので宜しくとの依頼だったが、私が選考委員ではないことを知ると、そのチネコの名前にも触れずに電話を切り、なんと所長宅にもアタックしたらしい。

前市長のチネコとは、彼の私設秘書。女性を要件に広告掲示したにも関わらず、この秘書は男性だったために、書類選考でカットされた。しかし、なんで広告の募集要件をしっかりと読みないで受けてくる奴がこんなに多いのだろうか？（浩司）

## 編集後記

◆インフレ高進のカトマンズではモノ不足が常態となりつつあります。12月には砂糖と灯油（ケロシン）の不足が深刻化しました。ネパール石油公社が12月の需要予測を誤ったことに原因があるらしいのですが、今年の冬は例年に比べて寒さが厳しく、需要増加はやむを得ないかと思えます。小売業者は当然灯油の売り惜しみをして、チネコ優先で灯油を販売します。ネパール石油公社は1月に入って灯油の緊急輸入を発表しましたが、ネパールルピーは米ドルに対してここ数カ月で10%下落しており、値上げは避けられない状況にあります。ネパールの一般家庭ではガスよりも低価格の灯油を生活燃料として使用しており、値上げの影響はかなり大きいと思われま。生活厳しいな・・・（浩司）

◆この年末年始の休暇を利用して、シンガポールに旅行しました。カトマンズには質の高い医療施設がなく、樹生の健康を考えてリスクの少ない場所で休暇を過ごそうと考えたからです。勿論、娯楽の少ないネパールから脱出し、さらに生活物資の調達もしておこうと思いました。シンガポールの町並みは人工的な印象がありましたが、都市計画面からは、エスカレータの傾斜が緩やかだったり街路の段差が少なかったりと、ベビーカーを押して動くには快適な設計がされていることがわかりました。また、子供連れやお年寄りに対するシンガポール人の優しさが印象的でした。電車に乗れば子連れの私達に席を譲ってくれるし、どんなお店に入っても店員が樹生をあやしながら「キュート」「キュート」と言って可愛がってくれました。樹生もご機嫌で周りに愛嬌を振りまき、体調を崩すこともなく、お陰で私達も6日間の滞在を楽しむことができました。社会基盤の面でも人々のモラルの面でも、シンガポールは日本以上の国だと感じました。機会があればまた行ってみたいと思えます。カトマンズの空港に着いた時は、また暫くはここでの生活が続くのかと思うとさすがに憂鬱な気分にもなりましたが、この休暇で十分リフレッシュでき、暫くはここで頑張れそうな気がします。（美澄）